

「語り」における時間構造

——ダイクシスの観点から——

坂井厚子

はじめに

1. 時間論—— Reichenbach から Traugott まで
2. 「語り」における時間構造
 - 2.1 タイプ1 「物語話法」
 - 2.2 タイプ2 「歴史的現在」

おわりに

はじめに

「時」とはいかなる物体であろうか。季節が過ぎゆく時、年の変わり目など、私たちは時の流れを感じる。しかしながら、私たちは心理的にいつも「時の流れ」の速さを同じように感じているとは限らない。時の流れを川の流れるに喩えれば、ある時は急流のようであり、また、ある時は、おだやかな流れのようであるといえよう。

こうした「時の流れ」は日常生活の中のみならず、物語や小説の中にも存在する。いわゆる「語られる時間」である。これは物語や小説の中の登場人物が活躍する時であり、物語や小説の作者が作成する「語る時間」とは区別されるものである。物語や小説はこの異なった二種類の「時の流れ」——いわゆる「語る」時と「語られる」時——によって構成されているといえよう。

ところで、小説や物語では、出来事を過去のものとして捉える語りのスタイルや、(本稿では「物語話法」とよぶ)作者があたかも現場で体験しているかのように描かれる歴史的現在という現象がみられる。これらの現象を前述した「語る」時間と「語られる」時間の二重構造の中でとらえた場合、どのように説明できるであろうか。

物語や小説における「語り」の研究はこれまで文体論や、視点等といった立場から主にすすめられてきた。本稿ではダイクティック (deictic) な立場から時間をとらえ、「語り」における時間構造を明らかにしてゆくことを目的とする。

まず、1節ではダイクティックな観点から書かれた時間論を含む従来の時間論を紹介する。第2節ではダイクティックな時間論を応用し、「語り」における時間構造を「物語話法」と「歴史的現在」の2つのケースに分け、明らかにする。

1. 時間論—— Reichenbach から Traugott まで——

本節では、従来の時間論についての研究を紹介したい。

時間には、哲学的時間、心理的時間、文法的時間等が存在する。哲学的時間は過去→現在

→未来と一方的にすすむ直線的な時間である。この一方的な時間を文法的に説明しようと試みたのがライヘンバッハ (Reichenbach) である。氏は発話の現在時 (speech time) と事件時 (event time) 及びそれに関連した参照時 (reference time) を設定することにより、時間を文法的に説明しようとした。

Comrie は時制を absolute tense 及び relative tense に区分した。absolute tense とは、発話時を基準とした時制である。これに対し、relative tense は発話時を基準とせず、時間を出来事の前後関係でとらえようとしたものである。Comrie によれば、例えば、"the day before" という言葉は発話時を基準としておらず "the day" を基準としており、一種の relative tense である、とされている。氏は relative tense について、次のように説明している。

現在	E	simul	S
過去	E	before	S
未来	E	after	S

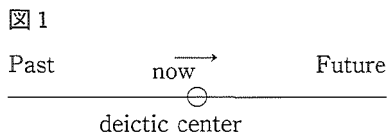
E=Event Time

S=Speech Time

これらの時間論はいずれも時間を直線的なものとして捉えるという前提に基づいている理論である。確かに時間を文法的に説明しようとするさい、時間を直線的に捉えた方が便利であろう。しかし、時間そのものを現象として捉えた場合、はたして時間は過去→現在→未来と一直線にすすむもの、と決められるだろうか。実際には別の現象が起きているのをそのように感じているだけなのではないだろうか。Fillmore, 及び Traugott は時間論を空間論とも関連づけ、deictic な立場から考察をすすめた。

すべての発話は発話者/発話場所/発話時を基準として行なわれるが、そういう談話の場面を直接に指示する語を deictic words という。また、発話者/発話場所/発話時 (I/here/now) の中心を deictic center とよぶ。

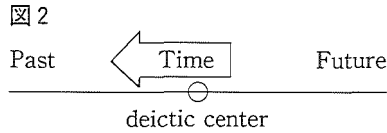
Fillmore (1971) は deictic な立場から、時間を ego-moving と time-moving の二種類のとらえ方に分けた。ego-moving は deictic center が過去→現在→未来と移動するに従って時間が過ぎるという考え方である。図式化すると次のようになる。



すなわち deictic center の移動を時間の流れ、とするらえ方である。古語に「来し方行く末」という言い方があるが、これは deictic center が過去からやって「来て」未来の方向へ「行く」という、ego-moving の考え方に基づいた時間のとらえ方であるといえよう。

これに対し、time-moving は時間を一種の“動く物体”とみるとらえ方である。この場合、deictic center は固定し、時間という物体が未来から来て、過去の方向へ去っていくというとらえ方をする。この場合、時間の「前」は過去、「後」は未来の方向にむいている。10年先の未来のことを「10年後」、10年前の過去のことを「10年前」とよぶが、これは time-

moving による時間のとらえ方がなされている証拠であるといえる。図式化すれば、図 2 のようになる。



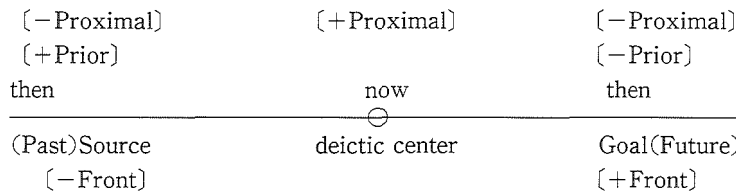
小泉（1990）は ego-moving は時間が固定し、空間が移動するというとらえ方であり、time-moving は空間が固定し、時間が移動するというとらえ方である、と指摘している。

「時間」を文法的に説明しようとする時、われわれは ego-moving のように過去を後ろ、未来を前のようにとらえがちであるが、未来に対して「3年後」過去に対して「3年前」という言葉を使っているように、実際には time-moving でとらえている場合も多いのである。

Elizabeth Traugott（1978）は、時間という抽象的で不可視的な概念を〔±Pro〕（遠近）、〔Source, Goal〕（起点及び着点）〔±Front〕（前後）等の要素をとり入れることによって空間的な概念として説明しようとした。氏は、「時間」を常に deictic center（発話者／発話場所／発話時）を基準とする時間のとらえ方をする Tense と、出来事の連続として時間をとらえる Sequencing に分け、deictic な立場から興味深い考察をすすめている。

氏によれば、Tense は deictic center を基準とした時のとらえ方である。氏によれば、現在（発話時）は〔+Proximal〕という要素で示され、過去は〔-Proximal〕〔-Front〕、〔Source〕〔+Prior〕という要素で示される。これに対し、未来は〔-Proximal〕〔+Front〕〔Goal〕〔-Prior〕という要素で説明される。図式化すれば次のようになる。

図 3

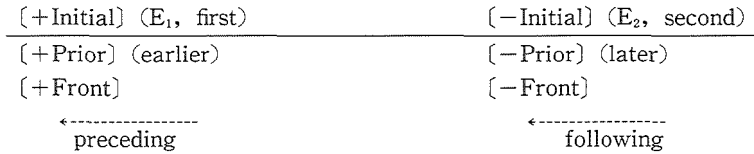


Traugott は deictic center を基準とし、〔-Proximal〕の要素により、未来、過去に共通して用いられる語の例として“then”という語をあげた。日本語では先（さっき）ということばがあてはまるといえよう。Tense の時間構造は、話者を中心として時間が過去から未来へ移動していくという Fillmore の定義するいわゆる ego-moving に共通した特徴をもっているといえる。deictic center は常に未来の方向へ移動しているため、前方は未来、後方は過去となる。Tense による時間構造をさらに比喩的に説明すれば、ある一本の道を過去（後方）から未来（前方）の方向へ歩くことによって時間が経過していくといえる。

これに対し、Sequencing は出来事の連続として時間をとらえる。すなわち、E₁, E₂, E₃, ……といった出来事が相互に関わりをもちながら連続することによって時間を構成している。これは、Tense のようないわゆる時間軸を基準としたとらえ方ではない、と氏は主張してい

る。出来事を相対的に関連づけた点では Comrie の relative tense に共通しているが、〔±Initial〕〔±Front〕等といった空間的な概念を用いた点、deictic な要素を結びつけた点などが異なっている。図式化すると次のようになる。

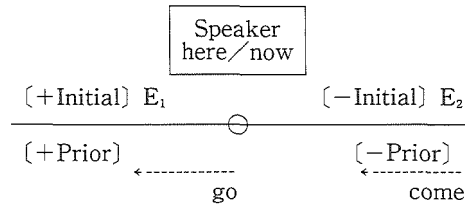
図 4



Tense と Sequencing の相違点を氏は次のように述べている。Tense においては、発話者は現在のみならず〔-Proximal〕の性質をもつ過去、未来の出来事とも直接関連づけられている。しかし、Sequencing においては、前の出来事は後の出来事と直接関連づけられてはいるが、話者とは直接関連づけられていない。

しかし、Sequencing は常に話者とは無関係であるとは限らない。氏は、第 1 の出来事 (E₁) と第 2 の出来事 (E₂) の間に deictic center を位置づけた場合、次のようになると説明している。

図 5



氏によれば、例えば “Coming year” “the years gone by” という言葉に代表されるように、最初の (前の) 出来事 (E₁) は話者 (deictic center) から離れていく方向に移動し、次の出来事 (E₂) が話者 (deictic center) に近づく方向に移動する。すなわち、deictic center を基準に考えた場合、deictic center は固定し、出来事が未来から過去へ、相互に関連しながら連続的に移動することになる。これは Fillmore の定義するいわゆる time-moving と共通した特徴であると言えよう。この現象を比喩的に説明すれば、プラットフォームに立って、(未来から過去の方角に向かって) 走る電車を見ている状態であると説明できよう。(この場合、プラットフォームに立っている位置が deictic center、列車が出来事の連続、となる。)

以上、ライヘンバッハから Traugott までの時間論について紹介した。

deixis の概念を応用した Fillmore, Traugott の時間論は、従来の直線的な時間軸を基準としたものでなく、時間そのものを現象として捉えているという点で興味深い。その中でも ego-moving と time-moving の 2 通りの時間の捉え方は、tense と sequencing の 2 通りの捉え方と同様、時間を時間の枠内で捉えたのではなく、空間との関わりの中で捉えたという点で

注目されるべきであろう。

Fillmore, Traugott はこれらの時間論を主に語彙のレベルで証明しようとした。しかし、これらの時間論は単に語彙のみにとどまらず discourse のレベルに広げ、応用していくことが可能ではないかと考える。

次節では、日本語の物語・小説における「語り」の時間構造を Fillmore, Traugott の時間論を応用し、明らかにしていきたい。

2. 「語り」における時間構造

前節では、deictic な観点からの時間論も含めた「時間論」を紹介した。本節においては「語り」における時間構造を特に deictic な観点から明らかにしていきたい。

小説や物語の中には、二種類の時間が存在する。「語る」時間と「語られる」時間である。

「語る」時間は物語の語り手（作者）が物語を作成する時間である。その時間の中では、作者の視点から物語が展開されてゆく。しかし、もう一方で、物語の中には「語られる」時間が存在する。いわゆる物語特有の時間である。私たちは物語を読む時、あたかも登場人物の世界に身をおいたような錯覚に陥る時がある。これは主人公の視点から物語が展開しているためである。そこには物語特有の時間——「語られる」時間——が存在している。「語り」における時間構造は「語る」時間と「語られる」時間の二重構造になっているといえよう。

ところで、「語り」には、作者の視点から出来事を過去のものとして捉えるスタイル（本稿では「物語話法」とよぶことにする。）や、作者と主人公の視点が重なり、作者があたかも現場で体験しているかのように描かれる歴史的現在というスタイル等がみられる。この2つのスタイル——物語話法と歴史的現在——は時間の二重構造の中で捉えた場合、どのように説明できるであろうか。特に歴史的現在の場合、あたかも物語の時間が静止してしまったように感じられるが、この現象は「語り」の時間構造の中でどのように説明できるであろうか。

以下では、実際の物語・小説などを題材に「語り」における時間構造——特に物語話法と歴史的現在の2つの場合について—— deictic な時間論の立場から考察をすすめたい。

2.1 タイプ I 「物語話法」

- (1) ①むかしむかし、あるところにおじいさんとおばあさんがいました。②子どもがなかったものですから、子どもがほしくてほしくて、明けてもくれても、このことばかり神さまにお願いしておりました。（一寸法師）

これは「物語」や「昔話」にみられる「語り」の形式である。(1)からもわかるように、この「語り」の形式の特徴は完了形「た」で終わる場合が多い。た形（完了形）を使うことにより、作者は物語の中の出来事を現在とは切り離れたもの、すなわち、過去のものとしてとり扱っている。こういったスタイルを本稿では「物語話法」とよび、歴史的現在等のような場合と区別することにする。

物語話法の使われているケースは昔話ばかりでなく、小説等にも多くみられる。

- (2) 八時半ごろまで明るい夏時間で、菊治は夕飯の後、縁側に寝そべりながら、女中が買って来た蛍籠をながめていた。白っぽい蛍の火はいつとなく黄みを加えて、日も暮れた。しかし、菊治は明りをつけに立つでもなかった。

菊治は四五日会社の休みをとって、野尻湖にある友人の別荘に行き、今日帰ったばかりだった。
「千羽鶴」

(2)においては、いずれも作者の視点から出来事が客観的にとらえられている。主人公の視点（菊治の視点）は第三者的に描写され、作者の視点から切り離されている。この小説や物語にみられる「物語話法」を時間の deixis という観点からとらえた場合、どのように説明できるであろうか。次の文をみてみたい。

- (3) ①おひめさまの机の上に、おもちゃのような小さな法師のうちがつくれ、そこで法師はくらしておりました。②そしておひめさまの読まれる本を一枚一枚めくる役をつとめたり、すずりのふちを綱わたりのようにわたって遊んだりしていました。③そして毎日のようにおともをして、清水の観音さまへおまいりいたしました。

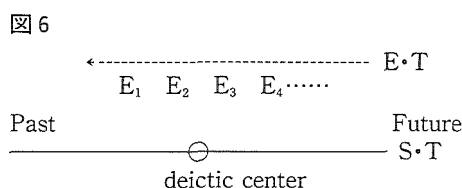
これは前出の「一寸法師」の中の一節である。ここでも完了形「た」が用いられており、物語話法のスタイルによって書かれていることがわかる。作者の視点は物語を作成する時（いわゆる「語る」時）にあり、物語の中の時（いわゆる「語られる時」）とは切り離され、固定している。deictic な観点から説明すれば、作者を基準とする deictic center（発話者／発話時／発話場所）は「語る」時を基準とした時間軸上に固定しているといえる。以上から、「語る」時における作者の視点は変化せず、固定していることがわかる。しかし、これに対して「語られる」場面は時々刻々と物語の中で変化していく。(3)の場合においては、「語られる」場面は①おひめさまの机の上→②本やすずりの上など、→③清水寺、と物語の中の「時」が経過するにしたがって変化していく。いわばそれぞれの出来事が①から②、②から③と、相対的に関連をもちながら連続することにより、時が流れているといえよう。「語られる」時とは、相対的に関連をもつ出来事の連続といえる。以上から、「物語話法」における時間構造は「語る」時と「語られる」時の異なった2つの時間の二重構造になっているといえる。

この「物語話法」にみる時間の二重構造を deictic な観点から空間的な概念を用いて説明するとどのようになるであろうか。まず、「語る」時においては、作者を基準とした deictic center が固定している。deictic center を中心とし、過去は遠方のもの、すなわち〔-Proximal〕、現在は〔+Proximal〕ととらえられるが、これは Traugott の述べるいわゆる“Tense”の時のとらえ方と共通しているといえよう。しかし Traugott が deictic center は常に移動するもの、ととらえているのに対し、「物語話法」では、「語る」時を基準とする deictic center は移動せず、作者の物語作成時に固定している、という点で異なる。

これに対し、物語の中の時、すなわち「語られる」時は $E_1, E_2, E_3 \dots$ と連続した出来事が相互に関わりをもつことによって相対的に時間をとらえるとりえ方である。Traugott の述べるいわゆる Sequencing による時間のとりえ方と共通した特徴をもっているといえよ

う。

物語話法における時間構造は、作者を中心とする deictic center を基準とする「語る」時間と、出来事の連続による「語られる」時間の2つの異なった時間が二重になっているといえる。これを図式化すると次のようになる。(語る時を S・T (Speech Time), 語られる時を E・T (Event Time) とする。)



S・T (「語る」時) の deictic center は物語の作者を基準としたものであり、固定している。E・T (「語られる」時) は物語中の出来事の連続である。「語り」の中で、作者を中心とする deictic center から E・T を観察すると、ちょうどプラットフォームに立っている人が動いていく列車を見るように、物語中の出来事が E_1, E_2, E_3, \dots と古い出来事から順に作者を中心とする deictic center の前を移動していく現象がおきていることになる。 E_1, E_2, \dots の連続した移動は未来から過去へという方向で移動し、「語られる」時間を構成している。「物語話法」においては、作者を中心とする deictic center は「語る」時間軸上 (S・T) に固定しているが、「語られる」時間 (E・T) は出来事の連続の移動により構成される。Fillmore の定義する Time-moving に共通した特徴を物語話法はもっているといえよう。

2.2 タイプII 「歴史的現在」

2.1 では「物語話法」における「語り」の時間構造について考察した。しかし、小説や物語では常に完了形が用いられているとは限らない。いわゆる「歴史的現在」とよばれる方法では、物語中の出来事が過去の出来事であっても現在形が用いられている。このタイプは物語中の出来事があたかも浮彫のように描写され、読み手に臨場感を与える役割を果たしているといえる。また、「歴史的現在」は読み手に物語の時間が一瞬止まってしまったかのような印象を与える。この現象は「語り」における時間の二重構造の中でどのように説明できるであろうか。2.2 では「歴史的現在」について deictic な観点から時間構造を明らかにしていきたい。

以下は、芥川龍之介「羅生門」の冒頭部分である。

(4) 或日の暮方のことである。① 一人の下人が羅生門の下で雨やみを待っていた。②

広い門の下には、この男の外に誰もいない。③唯、所々丹塗のはげた、大きな円柱にぎりぎりすが一匹とまっている。④羅生門が朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や採烏帽子がもう2、3人はありそうなものである。⑤それが、この男の外には、誰もいない。⑥

下線部は、②の場合を除き、すべて現在形が用いられている。作者はこのように現在形を用いることによって読者にあたかもその場に居合わせたような臨場感を与えている。このような手法——いわゆる歴史的現在——は作者自身がその視点から離れ、主人公の視点から出来事をとらえるという役割も果している。例えば、「大きな円柱にきりぎりすが一匹とまっている。」の部分では、作者の視点から出来事をとらえられているというよりむしろ、主人公の視点から出来事がとらえられているといえる。

これに対し、「…下人が雨やみを待っていた。」のように完了形の用いられている②の場合には、作者の視点が明確にだされている。いわゆる物語話法のタイプである。芥川はこの文について、「羅生門」の中で次のような興味深い文章をかいている。

(5) 作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも格別どうしようと云う当てはない。ふだんなら勿論、主人の家へ帰るべきはずである。

……

(5)では、(4)でのべた「羅生門」の冒頭部分「一人の下人が羅生門の下で雨やみを待っていた。」に対する、作者自身のコメントである。(5)の文からもわかるように、芥川は冒頭部分における「一人の下人が……雨やみを待っていた。」の文をかいた時、明らかに作者の視点から出来事をとらえていた、ということができる。

前節では、「物語話法」の場合、作者自身の視点は固定しており、「語られる」時間は物語の出来事が未来から過去の方へ、連続して移動していくことにより構成される、と述べた。これに対し、歴史的現在が用いられている場合、出来事と同時に、作者の視点も動いていて、しかも物語全体の時間が流れているというよりむしろ、瞬間、瞬間がうつしだされ、全体として時間が止まってしまったような印象を読み手はうける。例えば、「広い門の下には、この男の外に誰もいない。」(E₁とする)、「唯、所々丹塗のはげた、大きな円柱にきりぎりすが一匹とまっている」(E₂とする)において、E₁とE₂は出来事として前後関係となっている。しかし、出来事の移動により時の流れを感じるというよりも、むしろ、E₁、E₂の瞬間がうつしだされ、全体として時が止まっているような印象をうけるのである。この現象は deictic な時間論の立場から、どのように説明できるであろうか。

まず、「語られる」時 (E・T) は物語話法と同様、出来事 E₁、E₂、E₃……が相互に関連しながら未来から過去へ、と移動している。この点においては物語話法、歴史的現在の2つのスタイルにおいて相違ない。

しかし、「語る」時 (S・T) においては、物語話法と歴史的現在の場合で異なる。物語話法においては、作者を中心とする deictic center は固定している。したがって、固定した deictic center の位置からは、E・T (「語られる」時間) は移動しているように見える。「物語話法」では、このように物語の中の出来事が (作者の視点からみると) 移動し、時間が経過していくように感じられる。これに対し、「歴史的現在」において物語の時間が止まったように感じられるのは何故であろうか。前述のとおり、「語られる」時間は、「物語話法」「歴史的現在」のいずれにおいても、出来事の連続であり、未来から過去へと移動して

いる、という点で共通している。しかしながら、この出来事の時間（E・T）を観察する話者の視点が異なるため、「物語話法」及び「歴史的現在」における時間が一方では動いているように、一方では静止しているように感じられるのである。deictic な立場から詳しく述べてみると、「物語話法」においては、S・T上（「語る」時間）の deictic center は固定しているため、物語全体の時間は移動しているように感じられる。いわばプラットフォームの上から立って移動する電車を見ているのと同じ現象になる。これに対し、「歴史的現在」においては、S・T上の deictic center は固定せず、移動しているという点が異なる。S・T上の deictic center（いわゆる作者を中心とした deictic center）の移動の方向及び速度はE・T（「語られる」時間）を構成している出来事の連続の移動と同じである。この2つの移動が同方向・同スピードであるため、作者の視点からはあたかも物語全体の時間が止まってしまったかのような感じをうけるのである。いわば、走っている電車の中から、同方向・同速度で走っている電車を見ているのと同じ状況であるといえよう。

「物語話法」及び「歴史的現在」における時間構造を図式化すると次のようになる。

図7 A 物語話法

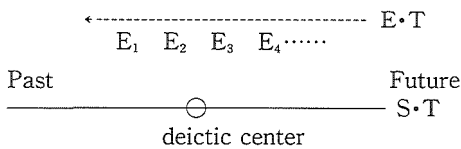
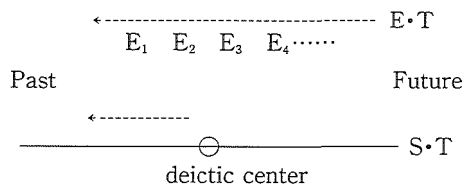


図8 B 歴史的現在



A, B いずれも E・T（「語られる」時間）は出来事の連続で、E₁, E₂, E₃……といった出来事が相互に関連しながら未来から過去へ、と移動していくという点で共通している。すなわち「語られる」時間については、A, B いずれも同じように移動している。しかしながら、「語られる」時間を観察する作者の立場——いわゆる S・T 上の作者を中心とする deictic center ——が異なるという点が、A, B における時間構造の相違点を生みだしているといえる。つまり、A「物語話法」においては、S・T上の deictic center は固定しているが、B「歴史的現在」においては移動しているという点が2つのスタイルの相違点である。

歴史的現在のスタイルを使うことによって作者は物語の出来事と同方向、同スピードで視点を移動させる。このため、作者があたかも物語の現場に居合わせたかのような臨場感を与えることになる。また、「語る」時間と「語られる」時間が平行して移動しているため、作者の視点からはあたかも時が止まっているかのような印象をうけるのである。

以上、2節では「語り」における時間構造について、「語り」を「物語話法」、「歴史的現在」の2つのタイプに分け考察をすすめた。「物語話法」においては、E・Tのみが移動しているのに対し、「歴史的現在」においてはE・T及びS・Tで2重の移動がおこっているという点で異なる。「物語話法」においては「語られる時間」（いわゆる物語の中の時間）が移動し、「歴史的現在」においては静止しているように見えるのは、この違いのためであるといえよう。

おわりに

本稿は、deictic な立場から時間をとらえた Fillmore, 及び Traugott の時間論を「語り」に応用し、「物語話法」と「歴史的現在」の2つのタイプについて、その時間構造を明らかにしようと試みたものである。今回はこの2つのタイプについてそれぞれとり上げたが、実際の小説のデイスコースにおいては、この異なった2つのタイプが交錯してあらわれている場合も多い。今後はこのようなタイプにも広げていく必要がある。尚、今回の仮説はまだ不十分な点も多いと思う。時間と空間のダイクシスを関連づけながら今後も修正を加えていきたいと思っている。拙稿について御批判・御意見をいただければ幸いに思っている。

付記

本稿は、修士論文「古典語における話法の考察——ダイクシスの観点から」の一部を加筆、修正したものである。尚、修士論文の執筆に際しては小泉保先生に大変お世話になった。記して感謝の意を表したい。

参考文献

- 安藤貞雄 「英語の論理 日本語の論理」大修館書店 1986
 Comrie, Bernard Tense, Cambridge University Press, 1985
 Fillmore, Charles Santa Cruz lectures on deixis, Indiana Univ. Press, 1971
 小泉 保 「言外の言語学」大修館書店 1990
 Traugott, Elizabeth 'spatio-temporal relations' Universals of Human Language, Stanford University Press. 1978

参考資料

- 坪田 譲治 「日本むかしばなし」新潮文庫
 芥川龍之介 「羅生門」 新潮文庫
 川端 康成 「千羽鶴」 新潮文庫